

示唆するところが大きいと思われる。なぜならば、「市場」勘定はいわゆる R. ストーンの converter matrix と同一の役割を演じることになるからである。

[倉 林 義 正]

ジョゼフ・スタッサール

『静止人口の経済的利益と不利益』

Joseph Stassart, *Les Avantages et les Inconvénients Économiques d'une Population Stationnaire*, Faculté de Droit, Liège, Martinus Nijhoff, La Haye, 1965, 234, pp. Collection Scientifique de la Faculté de Droit de l'Université de Liège.

1. 本書はベルギーの人口理論家 J. Stassart の手になる近年の力作である。全体の構成は序論をのぞいて4部に分け、末尾に全体の結論と文献目録、人名索引、表目次、事項索引をおいている。

序論でのべているように、本書の目的は人口変動の経済的帰結を分析することであり、具体的には出生増加主義者 les natalistes とともに急速な人口増加が経済成長に有利であるというべきか、それともマルサス主義者 les malthusiens とともに静止人口もしくはわずかに増加する人口が経済によい影響を与えるというべきかが問題となる。視点は経済的なものにかぎられ、その理論的実証的な分析結果は何ら政策的含意をもたない。なお、実証研究の対象としてはベルギーをとっている。

2. 第1部ではまず、19世紀中葉以降におけるベルギーの人口推移を総覧する。出生率、死亡率、自然増加および年齢構造について概観したのち、安定人口理論に依拠して出生力と年齢構造の関係を理論的に取り上げる。そして以下の分析は低いもしくは高い出生力の経済的結果にかかわることが指摘されている。

本論は第2部と第3部で展開される。第2部でははじめに静止人口またはわずかに増加する人口が経済的に有利であるとする著者のいわゆるマルサス主義的テーゼを擁護する議論をいくつかの命題にまとめて提起する。次に、そのテーゼに対するさまざまな角度からの反論を同様にいくつかの命題に分けて紹介し、おわりに結論をおいている。出生増加主義的テーゼを支持する第3部でも同じような構成がとられている。

3. 第2部ではまず、「低出生力は活動人口の相対的比重を高める傾向がある」という命題を証明しようとす

る。この命題は、第1に低出生力は労働年齢にあるひとびとの割合を高める。第2にそれは婦人の職業労働の可能性を高める、という2面から考察される。第1点についてはベルギーの年齢構造を歴史的に分析した結果、その命題を支持しているが、それに対する反論として、a) 今日子供の負担は以前より重い、b) 老人の負担は子供の負担より重い、c) 出生力低下は成年人口の年齢構造を老年化する、といった議論が紹介されている。第2点については、婦人雇用の測定をめぐる複雑な問題があるため判定は困難であるが、一応出生力低下は婦人に対し職業活動の可能性を高めると判断される。これに対する反論もまた多種多様である。以上の2面から総合的に判断して、著者は年齢構造の観点から、低出生力が経済的に有利であるという一応の結論を出している。

第2部における第2の問題は、「低出生力は人口投資の重圧を減ずる」という命題にかかわる。人口投資(les investissements démographiques)は、増加人口に残余の人口と同じ生活水準を享受させうる設備を装備するに必要な投資と定義される。一方、1人当り資本を増加させ、したがって1人当り生産、ひいては生活水準を高める投資を経済投資(les investissements économiques)という。人口投資は次式によって明確に表現される。

$$I=r(R.N.)m$$

ここで I は人口投資、 r は人口の年増加率、 $R.N.$ は国民所得、そして m は限界資本係数である。いまベルギーに例をとって $m=4$ 、 $r=0.5$ とすれば、人口投資は国民所得の2%を占める。しかし $r=1.5$ に上昇すると、人口投資は年々国民所得の6%を吸収することになる。 $r=0.5$ ならば、国民所得の6%の投資は国民の生活水準を年1%の割合で高めえたはずである。ここに理論モデルからえたマルサス主義的人口(成長のおそい人口)の経済的有利性の論拠がある。Stassart はベルギーにおける人口増加と住宅需要の関係を実証的に分析し、その理論モデルの実際的意味を確認している。この議論に対する反論としては、人口増加は貯蓄を増加させるような状態をつくり出すという S. Kuznets の見解、人口投資は1人当り生産を増加させる、限界資本係数は不変ではないといった意見があげられているが、人口投資に関するかぎり、マルサス主義的人口の有利ははっきりしていると著者は考えているようである。

4. 第3部では出生増加主義的テーゼに有利な議論が展開される。第1の命題は、「人口投資は1人当り生産を増加させる」というものである。それによると、理論的には定義の通り、人口投資は1人当り生産の減少を妨

げるだけの機能しかもちえないのであるが、現実には人口投資が技術進歩の導入を有利にし、置換投資の相対的比重を減じ、そして規模の経済を生ずるが故に生産性を高めるといふ。

Stassart は R. Dehem や L. Dupriez の論述を引用して、今日の経済成長は資本蓄積よりも技術革新に、投資の量より質により多く依存していると説く。たとえば置換投資は帳簿上では少しの経済効果をも発揮しないが、実際問題としては、有効耐用期間中の技術進歩がこの置換投資を新規投資と同様の性質に近づける質的側面をも含んでいる。Stassart は人口投資も置換投資と同じ性質をもっているという。さらに、人口投資は粗投資の一部を形成しているので、急速な人口成長は粗投資の増加率をはやめ、置換投資の比重を減ずる。これは経済投資を増大させるから生産性を向上させるのに役立つ。また、人口投資が増大すると、企業の内部経済、産業全体の外部経済を生じて、人口の一定規模までは有利な経済効果をもちうる。

この命題に対する批判的見解としては、かりに人口投資に関して上述のような有利な効果を認めるとしても、経済投資はより一層多くの同様な効果をもつという議論が有力である。いま粗投資の大きさが同一で人口増加率の異なる2国を考えた場合、明らかに人口増加率の低い国で経済投資は大きく、したがって1人当り生産はより急速に増加することになるからである。しかしながら、静止人口は慢性的な低位雇用を生じ、またそれは動脈の硬化した人口であり、マルサス主義者の考えた投資政策をなしとげるに十分な人力を自由にはできない、という反批判もあって、その利害得失を一概に判定しえない、と Stassart はいふ。

人口増加の有利な効果を表現する第2の命題は、「人口増加は職業構造の適応を容易にする」というものである。経済成長にとって労働力の産業間再配分が必要条件であることは疑いない。この必要性は産業部門によって技術進歩率が異なり、また各部門の生産物に対するひとびとの需要がときとともに変化することから生じてくる。この点で、急速な人口増加は新規労働力を多く生み出すので、拡大しつつある部門の需要に対し容易にこたえることができる。またそれは生産年齢人口の構造を若くするので、就業労働者についても比較的高い流動性が期待できる、といった利点を数えることができる。これに対し、労働力の適正配分は人口と無関係に行なわれうるなどの異論もあるが、著者はこの労働力の流動性に関するかぎり、かなり明瞭に出生増加主義を支持している。

第3の命題は、「人口増加は完全雇用の1要因である」という長期停滞論者の主張であり、とくに人口増加の投資誘因に対する影響をめぐる J. M. Keynes や A. J. Coale 等の所説を中心に論じている。ここでも Stassart は、「人口増加は完全雇用を保証する唯一的手段ではない」という反論を用意して決定的な態度を示していない。

5. 第4部では、人口増加と経済成長との関係を若干の国について実証分析した S. Kuznets 等の論文を紹介しているが、これは省略する。全体の結論として著者がのべていることは要するに、マルサス主義といい、出生増加主義といい、いずれも相応の理論的実証的根拠を有して、是非を定めがたいということである。

おわりに若干のコメントを付しておこう。本書は一言にして文献研究といってよい。それだけに理論の裏付けとしての実証分析の面に幾分弱さを感じるけれども、必要な関係論文、著書はもれなく引用もしくは参照されていて間然するところがない。巻末の文献目録も英仏語を中心に便利にできている。

本書のテーマは低出生力の経済的帰結であるが、その問題に関連するトピックは残らず取り扱われている。ただ人口増加に関連して教育の問題に言及してほしかったように思う。また、同じ人口増加の問題を経済成長理論の枠内で展開すれば一層興味深いものとなったであろう。

本書の著者 Stassart は最後の結論部分で、マルサス主義と出生増加主義のいずれにも軍配をあげなかったことについて、「読者は失望するであろう」と書いているが、実のところわれわれの読後感もそこにつきる。著者の立場はまことに公平であるが、読者としてはやはり著者の思想的基盤がどこにあるかを知りえないのは不満である。しかしともあれ、近年における人口論研究としては出色の労作と評価してよい。〔大淵 寛〕

エム・エル・エイデルマン

『社会的生産物の産業連関バランス』

(その作成の理論と実際)

M. P. Эйдельман, Межотраслевой баланс общественного продукта. (Теория и практика его составления.) Москва, 1966, 375 стр.

産業連関表と呼ばれる社会的生物の一種の国民経済的バランス表によって国民経済の部門連関や再生産構造を包括的に把握しようとする試みが、資本主義諸国においてのみならず、いまやソ連や東欧の社会主義諸国におい